

和辻哲郎

夏目先生の追憶

夏目先生の追憶

夏目先生の大きい死にあつてから今日は八日目である。私の心は先生の追懐に充ちている。しかし私の乱れた頭はただ一つの糸をも確かに手繰り出すことができない。私は夜ふくるまでここに茫然と火鉢の火を見まもつていた。

昨日私は先生について筆を執る事を約した。その時の気持ちでは、先生を思い出すごとに涙ぐんでいるこのご

ろの自分にとって、先生の人格や芸術を論ずるのがせめてもの心やりであるように思えたのであった。しかし今日になってみると、私は自分の心があまりに落ちついていないのに驚く。何を論ずるのだ。今ここで追懐の涙なしに先生の人格を思うことができるのか。ことに先生の芸術については、今新しく読みかえしている暇がない。数多い製作のあるものはおぼろな記憶の霞かすみのかなたにほとんど影を失いかかっている。あるものはただ少年時の感激によってのみ記憶され、あるものは幾年かの時日によって印象を鈍らされている。それでなお先生の芸術

を云^{うん}為^いすることができるとか。——私はあえて筆を執ろうとする自分の無謀にも驚かざるを得ない。しかも今私は二、三の事を書きたい衝動に駆^かられ初めた。私は断片的になる危険を冒^{おか}して一気に書き続けようと思う。(もうすぐに先生の死後九日目が初まる。田舎の事とてあたりは地の底に沈んで行くように静かである。あ、はるか^ほくに法鼓^{ぼうこ}の音が聞こえて来る。あの海べの大きな寺でも信心深い人々がこの夜を徹しようとしているのだ。)

先生の追懐に胸を充たされながらもなお静かに考えをまとめる事のできないのは、ただ先生の死を悲しむためば

かりでない。よけいな事ではあるがここにもう一つの理由を付け加える事を許していただきたい。私は心からの涙に浸された先生の死のあとにそれとは相反な惨ましい死を迎えるはずであった。しかし先生の死の光景は私を興奮させた。私は過激な言葉をもって反対者を責め家族の苦しみを冒して、とうとう今日の正午に瀕死の病人を包みくるんだ幾重かの嘘を切って落とす事に成功した。肉体の苦しみよりもむしろ虚偽と不誠実との刺激に苦しみがいていた病人が、その瞬間に宿命を覚悟し、心の平静と清朗とを取り返すのを見た時、私の心はいかに異

様な感情に慄ふるえたるう。……私は感謝し喜び、そうして初めてまじり気のない感情でしみじみと病人を悲しみ傷んだ。生と死の厳肅さが今日から病室を支配し初めた。夜が明ければ私は何をおいても死んで行く者を慰めるために出かけなければならぬ。——私は落ちついて先生を論ずるよりも、かえってこの方が先生に対する感謝を現わすに適している事を感じる。

——私は頭が乱れている。書き出しからしてもう主題にふさわしくない。

二

偶然であるか必然であるかは私は知らない、とにかく私は先生の死について奇妙な現象を見た。この秋、私は幾度か先生を訪ねようとして果たさず、ほとんど三月ぶりで十一月二十三日に先生を訪ねた。その日はいい天気だったので、Aとともに戸山が原を散歩して早稲田まで行った。Aは仕事がいそがしいため先生の所へは寄らないはずであった。私はいっしょに行きたいと言っている

いろ押し問答しながら歩いた。突然Aはいっしょに行こうと言いつ出した。それから十分ほどで先生の所に着いた。するとちょうど十分ほど前に先生が最初に血を吐かれた所であった。

私たちは何かの手伝いでもできれば結構と思って上がる事にした。座敷に通ってからふと床の間を見ると、床柱にかかった鼻まがりの天狗の面が掛け物の上に横面黒像を映している。珍しい面だと思って床柱を見たが、そこにはそんなに大きな面は掛かっていない。では小さい面が光のぐあいでき大きく映ったのかしらと床柱の側まで

行つて見ると、そこに掛かっているのはただ羽団扇はうちわと円い団扇だけであつた。しかし影は格好から、釣合から、どうしてもほんとうの面としか見えなかつた。あまりうまくできているのでその面が奇妙に気に掛かり、あとで悪かつたと感じたほど執拗しつようにその面を問題にした。——この出来事がひどく気になつていただけに、臨終の日「死面しめん」という言葉聞いた時、私は異様な感じに胸を打たれた。ほんとうに悪い辻占つじうらないであつた。鼻の曲がつていたことも。

私が先生に初めて紹介された日にも奇妙な事があつ

た。十八の正月に『倫敦塔』ろんどんとうを読んで以来書きたかった手紙を、私は二十五の秋にやっと先生にあてて書いて、それを郵便箱に投げ入れてから芝居に行った。私の胸にはまだその手紙を書いた時の興奮が残っていた。その時に廊下で先生に紹介された。それまでかつて芝居や音楽会で先生を見かけた事のなかった私が、その日特に芝居で先生と落ち合わなければならなかったのは私にひどく不思議に思えた。少なくとも私だけにはその日がただの日ではないように見えた。

三

先生を高等学校の廊下で毎日のように見たころは、ただ峻^{しゅんげん}厳な近寄り難い感じがした。友人たちと夕方の散歩によく先生の千駄^{せんだ}木の家に行ったが、中へは行って行く勇氣はどうしても出なかった。しかし先生に紹介された時の印象はまるで反対であった。先生は優しく人を吸いつけるようであった。そうしてこの印象は最後まで続いた。私はいかに峻厳な先生の表情に接する時にも、

先生の温情を感じないではいられなかった。

私が先生を近寄り難く感じた心理は今でも無理とは思わない。私は現在同じ心理を、自分の敬愛する××先生に対して経験している。それはおそらく自分の怯懦きょうだから出るであろう。しかしこの怯懦は相手があたかも良心のごとく、自分に働きかけて来るから起こるのである。その前に出た時自分の弱点と卑しさを恥じないではないられないゆえに起こるのである。私は夏目先生が気むずかしい癩癩かんしゃく持ちであることを知っていた。もとよりそれは単なる「わがまま」ではない。すべて自己の道義的

氣質に抵触するものに対する本能的な氣短い怒りである。従つて、自己の確かでない感傷的な青年であつた私は、自分が道義的にフラフラしているゆえをもつて無意識に先生を恐れた。そうして先生の方へ積極的に進んで行く代わりに、先生の冷たさを感じていた。こういう感じを抱いた者はおそらく私一人ではなかつたろうと思ふ。

この事実を先生の方から見ればどうなるか。私はそれを明らかにするために先生の手紙の一節を引く。——
「……私は進んで人になついたりまた人をなつてたりす

る性の人間ではないようです。若い時はそんな挙動もあえてしたかも知れませんが、今はほとんどありません。好きな人があってもこちらから求めて出るような事は全くありません。……しかし今の私だって冷淡な人間ではありません。……

「私が高等学校にいた時分は世間全体が癩にさわってたまりませんでした。そのためにからだをめちゃくちゃに破壊してしまいました。だれからも好かれてもらいたくありませんでした。私は高等学校で教えている間ただの一時も学生から敬愛を受けてしかるべき教師の態度を

もっていたという自覚はありませんでした。……けれど
も冷淡な人間では決してなかったのです。冷淡な人間な
らああ癩癩は起こしません。

「私は今道に入ろうと心がけています。たとい漠然たる
言葉にせよ、道に入ろうと心がけるものは冷淡ではあり
ません。冷淡で道に入れるものはありません。」

それは先生の前に怯懦を去った時直ちにわかただったこと
であった。先生はむしろ情熱と感情の過剰に苦しむ人であ
る。相手の心の動きを感じ過ぎるために苦しむ人であ
る。愛において絶対の融合を欲しながら、それを不可能

にする種々な心の影に対してあまりに眼の届き過ぎる人である。そのため先生の平生にはなるべく感動を超越しようとする努力があった。先生は相手の心の純不純をかなり鋭く直覚する。そうして相手の心を細かい隅々にわたって感得する。先生の心臓は活発にそれに反応するが、しかし先生はそれだけを露骨に発表することを好まなかった。先生は親切を陰でする、そうして顔を合わせた時にその親切について言及せられることを欲しない。先生にとつては、最も重大なことはただ黙々の内に、瞳と瞳との一瞬の交叉の内に通ぜらるべきであった。従つて先

生は対話の場合かなり無遠慮に露骨に突っ込んで来るにかかわらず、問題が自分なり相手なりの深みに触れて来ると、すぐに言葉を転じてしまう。そうして手ざわりのいい諧諔かいぎやくをもつて柔らかくその問題を包む（もちろん心の問題でもそれが個人的関係に即してではなく一つの人生観、思想問題としてならば、先生は底までも突っ込んで行くことを辞せなかつた）。これらの所に先生の温情と厭世観との結合した現われがあつたようである。

右のような先生の傾向のために、諧諔は先生の感情表現の方法として欠くべからざるものであつた。先生の諧

謔には常に意味深いものが隠されている。熱情、愛、痛
苦、憤怒など先生の露骨に現わすことを好まないものが。
そうして人々は談笑の間に黙々としてこの中心の重大な
意味を受け取るのである。先生がその愛する者に対する
愛の発表はおもにこれであつた。（私の考えではこれが
「諧謔」の真の意味である。従つて真に貴い諧謔は「痛
苦」から、「悩み過ぎる人」から、「厭世的な心持ち」
から、人生に「快活」をもたらそうとする愛の徴証とし
て産まれるのである。そうでないものは単に浮薄なる心
の徴候に過ぎぬ。）

四

——先生は「人間」を愛した。しかし不正なるもの不純なるものに対しては毫ごうも仮借する所がなかった。その意味で先生の愛には「私」がなかった。私はここに先生の人格の重心があるのではないかと思う。

正義に対する情熱、愛より「私」を去ろうとする努力、——これをほかにして先生の人格は考えられない。愛の

うち自然的に最も強く存在する自愛に対しても、先生は「私」を許さなかつた。そのために自己に対する不断の注意と警戒とを怠らなかつた先生は、人間性の重大な暗黒面——利己主義——の鋭利な心理観察者として我々の前に現われた。

先生にとっては「正しくあること」は「愛すること」よりも重いのである。私はかつて先生に向かつて、愛する者の悪を心から憐れみ愛をもつてその悪を救い得るほど愛を強くしたい、愛する者には欺かれてもいいというほどの大きい気持ちになりたいと言つた事があつた。そ

の時先生は、そういう愛はひいきだ、私はどんな場合でも不正は罰しなくては行かないと言われた。すなわち先生の考えでは、いかなる愛をもつてしても不正を許すことは「私」なのである。たとえば自分の愛子であろうとも、不正を行なった点については、最も憎んでいる人間と何の扱えらぶ所もない。自分の最も愛するものであるがゆえに不正を許すのは、畢竟ひっきょうイゴイズムである。

先生は自分の子供に対しても偏愛を非常に恐れた。親の愛は平等であるべきだ。もしそれを二、三にするくらいならむしろ平等に愛しない方がいい。この事は不断に

厳密な自己省察を必要とするのであるが、先生はこの点について非常に注意を払っていた。そうしてこの心がけがやがて人生全体に対して公平無私であろうとする先生の努力となって現われた。

五

先生が偏屈な奇行家として世間から認められているのは、右のような努力の結果である。ひいき眼なしに正直

に言つて、先生ほど常識に富んだ人間通はめつたにない。また先生ほど人間のなすべき当然の行ないを尋常に行なつていた人もまれである。ただ先生はその正義の情熱のために、信ずる所をまげる事ができなかつた。徳義的脊骨があまりにも固かつた。それが卑屈と妥協と中途半端とに慣れた世間の眼に珍しく見えたまでである。

しかし常識的という事が道義的鈍感を意味するならば、先生は常識的ではなかつた。先生はいかなる場合にも第一義のものをごまかして通る事ができなかつた。たとえ世間が普通の事と認めていようとも、とにかく虚偽

や虚礼である以上は、先生はひどくそれをきらった。先生の重んずるのはただ道徳的心情である。形式習慣にむやみと反抗するのではなく、ただ道徳的心情よりいでのみ動こうとしたのである。これを奇行と呼び偏屈と嘲あざけるのは、世間の道義的水準の低さを思わせるばかりで、世間の名誉にはならない。

先生の博士問題のごときも、これを「奇を銜てらう」として非難するのは、あまりに自己の卑しい心事をもって他そんたくを忖度し過ぎると思う。先生は博士制度が世間的にもまた学界のためにも非常に多くの弊害を伴なう事実に対し

て怒りを感じた。その内にひそむ虚偽、不公平、私情などに対して正義の情熱の燃え上がるのを禁じ得なかった。これは先生として当然な事である。「博士」は多くの場合に対世間的な根の浅い名声の案山子^{かかし}である。博士であると否とにかかわらず学者の価値はその仕事の価値によってのみ定まる。しかも世間は「博士」が大きい仕事の標徴であるかのごとくに考えている。そこに不正と虚偽がある。この点についてはおそらく真に真理のために努力する学者たちは先生の態度を是認しないであらう。

六

徳義的脊骨のあるものには四周からうるさい事、苦し
い事が集まって来る。先生はそのために絶えず癩癩を起
こさなければならなかった。しかも先生はその敏感と情
熱とのために、さらに内からその苦しみを強くしなけれ
ばならなかった。先生の禅情はこの痛苦の対策として現
われた傾向である。

先生の超脱の要求は（非人情への努力は）、痛苦の過多に苦しむ者のみが解し得る心持ちである。我々は非人情を呼ぶ声の裏にあふれ過ぎる人情のある事を忘れてはならない。娘がめっかちになつて自分の前に出て来ても、ウンそうかと言つて平気でいられるようになりたい、という言葉の奥には、熱し過ぎた親の愛が渦巻いているのである。

超脱の要求は現実よりの逃避ではなくて現実の征服を目ざしている。現実の外に夢を築こうとするのではなくて現実の底に徹する力強いたじろがない態度を獲得しよ

うとするのである。先生の人格が昇って行く道はここに
あつた。公正の情熱によつて「私」を去ろうとする努力
の傍には、超脱の要求によつて「天」に即つこうとする熱
望があるのであつた。

七

先生の諧謔はこの超脱の要求と結びつけて考えねばな
らぬ。もともと先生の気質には諧謔的な傾向が（江戸ツ

兎らしく）存在していたかもしれない。しかし先生は諧謔をもつてすべてを片づけようとする人ではなかった。諧謔の裏には絶えず厭世的な暗い中心の厳肅がひそんでいた。先生が単に好謔家として世間に通用しているのは、たまたま世間の不理解を現わすに過ぎないのである。我々は先生の人格が諧謔を通じて柔らかく現われるのを見る時、むしろ一種の貴さを感じないではいられなかった。そこには好謔家という觀念にあてはまる何ものをも認めざる事ができない。

先生の芸術はかくのごとき人格の表現である。

先生は自己の人格の内からさまざまな人物や世界を造り出した。この造り出し方において私は先生の芸術の一特長を注意したいと思う。

先生は眼の作家であるよりも心の作家であった。画家であるよりも心理家であった。見る人であるよりも考える人であった。小説家であるよりもむしろ哲人に近かった。そのためか、先生の作物に写実味の乏しいことは、さほど気にならない。（しかしドストイェフスキイが自分を写実主義と呼んだ意味でならば、先生もまた写実主義者である。）

私は先生の芸術に著しいイデエを認める。一の作物の結構はすべてそのイデエから出ているように思う。この意味で先生の作物はかなり「作られた」という感じの強いものである。しかしその感じはイデエの力強さの下にすぐ消えて行く。そうして我々は赤裸々な先生の心と向き合って立つことになる。

我々は先生の作物から単なる人生の報告を聞くのではない。一人の求道者の人間知と内的経路との告白を聞くのである。

九

利己主義と正義、及びこの両者の争いは先生が最も力を入れて取り扱った問題であつた。

『猫』は先生の全創作中最も露骨に情熱を現わしたものである。それだけにまた濃厚な諧謔をもつて全体を包まなければならなかつた。この作はおそらく先生の全生涯中最も道徳的癩癩の猛烈であつた時代に書かれたものであろう。念入りに重ねられた諧謔の衣の下からは、世間

の利己主義の不正に対する火のような憤怒と、徳義的脊骨を持った人間に対するあふれるような同情とがのぞいている。しかしこの時にはなお問題が先生自身の内生に食い入ってはいなかった。その後の諸作は漸次問題が内に深まって行く経路を示している。そうして最後の『明暗』に至って憤怒はほとんど憐愍れんぴんに近づき、同情はほとんど全人間に平等に行きわたろうとしている。顧みてこの十三年の開展を思うとき、先生もはるかな道を歩いて来たものだと思う。

その経路を概観してみると、『猫』の次に『野分』に

において正義の情熱の露骨な表現があった。『虞美人草』に至っては鮮やかな類型的描写によつて、卑屈な利己主義や、征服欲の盛んな我欲や、正義の情熱や、厭世的なあきらめなどの心理を剔抉てっけつした。その後の諸作においては絶えずこの問題に触れてはいたが、それを著しく深めて描いたのは『心』である。この作においては利己主義はついに純然たる自己内生の問題として取り扱われてゐる。私は利己主義の悪と醜さをかくまで力強く鮮明に描いた作を他に知らない。また執拗な利己主義を窒息させなければやまない正義の重圧の気味悪い底力も、前者

ほど突っ込んではないが（特に重大な所にギャップはあるが）、力を入れて描いてある。次の『道草』においても利己主義は自己の問題として愛との対決を迫られている。この作で特に目につくのは、主人公の我がいかに頑固に骨に食い入っているかをその生い立ちによって明らかにしたこと、夫や妻やその他の人々の利己主義を平等に憎んでいること、その利己主義を打ち砕くべき場合方法などを繰り返し繰り返し暗示していること、結局それがだんだん実現されそうになって行くという幾分光明のある結末が先生の作としてきわめて珍しいことなどである。

る。この作は明らかに次いで現われた『明暗』の前提を
なしている。『明暗』においては利己主義の描写が辛辣しんらつ
をきわめているにかかわらず、作者は各人物を平等に憐
れみいたわっている。そうして天真な心による利己主義
の征服を暗示するのみならず、一步一步その征服の実現
に近寄って行った。（先生はそれを解決しなかった。し
かしあるいは——自らの全存在をもって解決したのでは
ないのか。）

一〇

恋愛と正義の葛藤、利己主義による恋愛の悲劇なども、先生が熱心に押しつめて行った問題であつた。ここに先生の人生に対する厭世的な気分が現われている。恋愛は人生の中核をなすものであるが、しかしそれは正しく生きることと抵触しはしないか。また恋愛のある所に必ず幸福な心の融合があるという事は可能であろうか。人と人との間には掛ける橋がないという言葉は眞実ではなか

ろうか。

『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』などが右の題目の開展であることは明らかである。『三四郎』に芽ざして『それから』に極度まで高まった恋愛の不可抗の力は、ついに正義を押し倒した。作者はこの事を可能ならしめるために享楽主義者を主人公とした。しかし不可抗の力の強さをきわ立たしめるためには、あらゆる同情を不義の恋に落ちて行く男女の上に注ぐ事をも辞しなかつた。『門』はその解決である。男女の相愛はこれほど深まることができる。しかし押し倒された正義は執

拗に愛する者の胸を嚙かんでいる。完全に相愛する男女の生活にも惨ましい寂しさがある。そうしてついに正義は蛇のように謀反者の喉のどに巻きつく。

『彼岸過迄』においては愛を双方で認めながら心も体も近づく事のできない宿命的な悲劇が描かれている。さらに『行人』は夫婦の間でどうしても心を触れ合わせることのできない愛の悲劇を描いている。愛はついに絶望である。

この問題についても『道草』は一つの活路を暗示する。砕かれた心のみが愛を生かせ得るのである。『明暗』に

至ってそれは正面から取り扱われた。「私」を去れ。裸になれ。そこに愛が生きる。そのほかに愛の窒息を救う道はない。

一一

先生の厭世的な気分は恋愛を取り扱う態度に十分現われている。しかしそれがさらに明らかに現われているのは生死の問題についてである。ここに先生自身の超脱へ

の道があつたように思う。

元来先生は軽々しく解決や徹底や統一を説く者に対して反感を持っていた。人生の事はそう容易に片づくものでない。頭では片づくだろうが、事實は片づかない。

——しかしこれは片づける事自身に対する反感ではなくて、人生の矛盾や撞着どうちやくをあまりに手軽に考える事に対する反感である。先生は望ましくない種々の事実のどうにもできない根強さを見た。そうしてそのために苦しみがいた後、厭世的な「あきらめ」に達した。顧みて口先ばかり景気のいい徹底家の言葉に注意を向けると、思

わずその内容の空虚を感じないではいられないのである。

けれども「あきらめ」に達したゆえをもって先生は先生の矛盾不調和から眼をそむけたわけではなかった。先生はますます執拗にその矛盾不調和を凝視しなければならなかった。寂しく悲しく苦しかったに相違ない。（たとえ種々の点でいわゆる徹底家よりも「あきらめ」に沈んだ先生の方がはるかに徹底していたとはいえ。）

それゆえ先生は「生」を謳歌おうかしなかった。生きている事はいたし方のない事実である。望ましいことでも望む

べき事でもない。ただししかし生きている以上は本能的な生への執着がある、しなければならぬ事、のつと則らなければならぬ法則もある。それは苦しいかもしれない、苦しなくてもやむを得ない。——そもそも生きる事が苦しみ事なのである。生きていく以上は種々の日常の不快事を（他人の不正や自分自身の不完全や好ましくない運命やを）避ける事ができぬ。むしろそれらの不快事が生きていく事の証拠である。人生とはもともとかくのごときものにほかならなかった。

しかし先生は「死」を「生」より尊しとしながらも、

「死」を謳歌しなかった。死もまたいたし方のない「事実」として存在する。それは瞑想する自分には望ましいめいそう事実であるが、本能的には恐ろしい。強いて死を求めるのは不自然である。けれども死が人間の運命だという事は人間の不幸ではない。従って死んでもいいし死ななくてもいい、生きていてもいいし、生きていなくてもいい。

このような生死に対する無頓着が先生のはいつて行くところとした世界であった。先生はそこに到着するまでの種々の心持ちを製作の内に現わしている。『門』『彼岸過迄』『行人』『心』などはその著しいものである。こ

ここにも開展のあととは認められる。『心』において極度まで押しつめられた生死の問題は、右の無頓着が著しくなるにつれて、一種透徹な趣を帯びながら、静かに心の底に沈んだ。『硝子戸の中』がその消息を語っている。

一一一

しかし人生観のいかんにかかわらず、先生の内の「作家」は先生を駆使して常人以上に「生かせ」働かせた。

ことに生死に対する無頓着はかえってこの作家を強健ならしめたように見える。『明暗』を書いていた先生はある時「毎日すべったのころんだのとクダラない事を書いていっているのは、実際やり切れないね」と言った。実際こう感じる事もあったに相違ないだろう。しかも先生は渾身こんしんの力を注いで製作しないではいられなかった。そうして芸術的労力そのものが先生の心を満足させた。炎熱の烈しかったこの暑中も、毎日『明暗』を書きつづけながら、製作の活動それ自身を非常に愉快に感じていた。そのため生理的にも今までになく快適を感じていたらしか

った。（その実は製作の興奮のため徐々に身体を疲労させたのであつたらうけれど。）

先生が製作によつて生の煩わしさを超脱する心持ちは、私の記憶では、『草枕』や『道草』などに描かれていたと思う。

一三

私はきわめて概括的な、そのくせバラバラになつた観

察を書いた。もともと先生の芸術について適切な評論をなし得ようとは思っていなかったから、これくらいで筆を擱おきたい。

先生の芸術についてはなお論ずべき事が多い。私は先生が「何を描こうとしたか」について粗雑な手をちよつと触れたのみで、「いかに描いたか」の問題には全然触れなかった。そこへはいればとても容易に出られないと思つたからである。それに、私の今の心持ちはただひたすら先生の人格に引きつけられている。先生の技能が提供するさまさまの興味ある問題は、たとえその興味が非

常に深かろうとも、今直ちに私の心の中心へ来る事ができない。しかしそのために読者諸君の注意をこの方向へ向けて悪いというわけは少しもない。私は先生の死に際して諸君が先生の全著書を一まとめにしてあらためて鑑賞されんことを希望する。そうしてここに説いたような先生の人格と生活との表現がいかなる姿とリズムによって行なわれているかを子細に検せられんことを勧告する。先生の芸術はその結構から言えば建築である。すべての細部は全体を統一する力に服属せしめられている。さらにまた先生の全著書は先生の歩いた道の標柱であ

る。すべての作は中心を流れるいのちに従って並べられている。これらの物に親しむのはいかなる意味においても我々を益し我々を幸福にするだろう。

日本文学電子図書館

「和辻哲郎随筆集」

著 者：和辻哲郎

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

1995年9月18日 第1刷発行

日本文学電子図書館